

津田眞澂著

# 人工化社会と電腦文化

二二世紀の「こころ」の問題

急激な人工化、情報化の波は日本社会の基層文化を侵食し、新しい「電腦世代」が登場しつつある。「こころ」の問題から、日本の近未来像を提示し、21世紀の選択を考える。

定価2,400円(本体2,330円)

有斐閣

津田眞激著

# 人工化社会と電腦文化

二二世紀の「こころ」の問題

有斐閣

## はしがき

今の日本の世の中、なにを軸にして動いているのかわからない、というのが多くの人々の感じではないだろうか。二〇年ぐらい前までは、日本はどうあるべきかということについて、各人が絶対的基準を立てて口角泡を飛ばして議論する姿がいたるところで見られたものだ。こうして真剣な討論を対決させると、時には憎悪の丸出しで終わることもあるが、もっと良い見方を両者が討論のなかで生み出して、そのつど結論を出すという素晴らしいこともあった。今ではあらゆる意見が相対化され、議論しても、まあいいじゃないかで相手を傷つけずに、おだやかに結論もなく終わるようになった。こうして日本社会の姿も将来もぼんやりとして見えなくなってきたのだろう。

はっきりと意見をいう、という姿勢が消えたとし、そういう意見をもつ人は、偏っていると急速に敬遠されるようになってきたのではないだろうか。意見を明確にするとなると、どうしてもできるだけ少ない要素を使って、社会が動いている軸を説明するという方法をとらなくてはならない。一億人以上の人間がいろいろな関係の複合で世の中を動かしているのだから、そういう単純な要素の組合せで説明しようとするれば、そうじゃない、他にこういうことがある、という意見が当然に出てきて、話はうやむやに終わる。気楽に暮らせるのだから、思い切った意見は自分の中に押し込ん

で、他人の意見に同調していくほうが、嫌われないでうまくやっていく生き方だということになったのだろう。

そういうことはやめて、本書では、少数の要素で、日本社会の今の姿、そしてその姿の将来についての見通し、生き方についての意見をはっきりと提出することにした。まず第一編では、日本社会を動かしている軸を、いわばタテに、「政治経済システム」「人工化情報化社会」「核家族」の三つとし、この三つの構成軸が回転することによって、つづく第二編では、二一世紀に、「電腦人」という新しい日本人が登場してくることを描き出した。今の流行語である「新人類世代」はもうここで「新人類」ではなくなる。

これらの四つの要素で回転していく日本人社会で最大の問題は、そのなかを生きていく一人一人の「こころ」、およびその「こころ」がつくり出す生活文化の問題である。本書の中心はここに置かれている。それを第三編で取り上げた。今、私たちは二一世紀に向けて最後の選択をしている。本書の「結び」では、このままでおだやかに、人々が流れ流れて生きていくことを選択したら、回転していく社会がどうなるだろうか、という姿を描き出している。この「結び」は「あとがき」のつもりだ。

本書のキーワードは、政治経済システム、人工化情報化社会、核家族、情報人、電腦人、「こころ」の六つだが、このなかの「情報人」については『日本の情報化経営』（プレジデント社、一九九

〇年）でもう取り上げてしまったから、本書ではしつこくくりかえしてはいない。

現状の私からすれば、まことに思いがけないことながら、本書は古い知己である有斐閣書籍編集部の伊藤真介さんのご厚意によって世に出ることになった。心から謝意を表したいと思う。

一九九二年四月

著 者

目次

第一編 進む人工化社会の構成

● 序 (2)

第一章 政治経済システム

第一節 ビジネスの島

● 権力システム (5) 「エニグマ」 (8) 行政権力 (10)

第二節 中心は「ビジネス」の成長

● ビジネスが核心 (14) ビジネスの力学 (17) ビジネス核心は不変 (21)

第二章 モノとカネのビジネス

第一節 カネのビジネス構造

● 金融制度の自由化 (24) 国全体の資産構成 (25) 企業之力 (27)

第一節 「差別化」競争

● 本業+新規事業 (32) 差別化競争 (33) 差別化の特徴 (34) 差別化競争の弱点 (36) 「差別化」の意味 (42)

第三章 コンクリート人工社会の確立

第一節 国土のコンクリート化

● オフィスという住居 (49) 日本の国土 (52) コンクリート化の進展 (53)

第二節 国土の人工化の進展

● 自然地の転用 (53) リゾート人工化の推進 (57) 仮想現実の情報ネットワーク社会 (62)

第四章 生活者||核家族

第一節 核家族の定着

● 核家族の成立 (66) 核家族の増大 (67) 核家族としてのサラリーマン (69)

第二節 サラリーマンの生活姿勢

● サラリーマンの基本機能 (70) サラリーマンの特徴 (74) 生活者と

してのサラリーマン(81) 結び(85)

〔第一編参考文献〕 89

## 第二編 育つ「電腦世代」

● 序(92)

### 第一章 変わる勤労者像

第一節 イライラ青年が増える……………96

● イライラ型三三〇%(96) 会社の仕事はきつい(98) 会社と社員のギ  
ヤップ(104)

### 第二節 「相互情報型」勤労者像

● 「個立・連帯型」像の提唱(107) 相互情報型勤労者(109) 相互情報  
型勤労者像の開発と検定(111) 相互情報型勤労者像の大量検定(117)

第三節 雑居混合の会社疾走……………120

● 業務外注の流行(120) 労働市場の二元構成の定着(121) 混合職場の  
定着(124) 「情報人」と「相互情報型」(126) 「基礎人事」の問題(129)

## 第二章 「電腦世代」の登場

第一節 「電腦世代」が育つ……………134

● 子供たちに異変(134) コップ一杯の準備状態(135) 心身異常の増加  
(136) 外で遊ばない子供たち(138) 受験競争(140) 不気味な世界一(142)

第二節 構成力を欠く「電腦世代」……………143

● 共同生活基礎へのモラル低下(143) ひ弱さ(144) 構成力がない(146)  
電腦世代(148)

第三節 「電腦世代」勤労者の二二世紀……………149

● 「遊民」と「アバシー世代」(149) 日本社会の四〇年周期説(151) 世  
代の問題(152) 「電腦世代」勤労者の登場(154) 二〇二五年(156)

〔第二編参考文献〕 159

## 第三編 二二世紀の電腦社会と「こころ」の問題

● 序(162)

### 第一章 工業化と「こころ」

164

第一節 欧米の工業化時代……………164

- 日本人の「弱い自我」(164) 近代哲学の現実化(165) 工業化の時代(166) 闘争の時代(166) 「大疑惑」の発生(167) 「スピリチュアリズム」運動(168)

第二節 欧米世界の「*ヒココロ*」の性質……………169

- 世界の宗教(169) キリスト教(170) 科学と技術(173) 深層心理学の登場(174) 意識と無意識(175) 強い自我と弱い自我(178)

第二章 日本人の「*ヒココロ*」の基層……………180

第一節 日本人の基層文化……………180

- 基層文化と表層文化(180) 日本人の文化(181) 縄文文化の定着(184) 共同生活(185)

第二節 基層文化の「*ヒココロ*」……………187

- ミヤンゲ(187) 基層文化の蓄積(188) 縄文文化と弥生文化(191) 共同体の性質(193)

第三節 アミニズム、シャーマニズム……………196

- アミニズムという言葉(196) シャーマニズムの語源(197) シャーマニズムの定義(198) シャーマンの定義(199) シャーマンと宗教複合

- (201) シャーマニズムの生命(204)

第三章 超常能力・死後存在研究の発展……………206

第一節 「スピリチュアリズム」運動のなから……………206

- 「*ヒココロ*」の探究のために(206) 「スピリチュアリズム」運動の特徴(208) 「科学的研究」の登場(209) 「スピリチュアリズム」で出てきた現象(210)

第二節 新しい研究分野の出現……………212

- 新研究分野の胎動(212) 研究の新分野の登場(215) 深層心理学(217) サイ考古学と犯罪捜査(218) 大脳生理学(220)

第三節 超常心理学の開化……………223

- 超常心理学(223) 超常心理学の進展(224) ESPの問題(226)

第四節 死後存在の探究……………227

- 超常心理学の第二期(227) 臨死体脱体験(228) セイボムの調査結果(229) 国際臨死研究会(231) 臨死体験から臨終時体験へ(232) キューブラー・ロス(233) 死にゆく過程(233) 死は成長の段階(234) 臨終時体験調査(235) オシスの調査結果(237) 死後生存仮説の実証(240) 交叉通信(240) 前世記憶(242) 過去生逆行(243) 第四節の意義(245)

第四章 コンクリート社会と電腦文化

第一節 四〇年周期の日本……………248

● これからの四〇年(248) 共同体の消滅と移動(253)

第二節 電腦文化の形成……………256

● コンクリート社会(256) 電腦文化への道(258) 情報化経営(262)

姥捨て病院(264) 「こころ」の問題(268)

[第三編参考文献]……………271

結 び……………279

あとがき(287)

## あとがき

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃色のうつくしい朝の日光をのむことができます。またわたくしは、はたけや森のなかで、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいビロードや羅紗や、宝石入りのきものに変わっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうたべものやきものをすきです。これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

(中略)

わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、あなたのすきとおった本当のたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。」

これは宮沢賢治氏の最初の作品集『注文の多い料理店』の序文からの引用である。

一九九〇年五月にきつい個人的事情が生じて以来、ほとんどすべての「氷砂糖」の仕事から離れて、世の中から距離をおいてきた。有斐閣の伊藤真介さんから、長年のお約束だった原稿はどう

なったかというお尋ねがあったとき、私はその約束がもう果たせないことをお詫びした。それだけではあまりにも失礼である。そこで自分のために書いていた取りとめないばらばらな大部の文章を、こういう状態で、とお送りした。そうしたら伊藤さんは、そのなかからこれとこれで本にしましよう、本書の三つの編を選んでくださった。そうして出きたのが本書である。

そういう状態のなかで過ごしてみても今さらのように感じたことは、いざ人間としての深いところと接触するとなると、多くの人々がすべてを「情報」とするだけで、心の深いところで受けとめるようなことはしないし、自分たちだけのばらばらな生き方が普通になっていくということに出会った。

ことの是非ではない。千石保氏は『まじめの崩壊』（サイマル出版会、一九九一年）のなかで、「平成日本の若者たち」の価値観や態度は、「まじめ」ではなく「ノリ」(consummatory)だといわれるが、その性質はどうやらかなりの年配層にまでさかのぼっているように思われる。宮沢賢治がいう「氷砂糖」への執着、できている制度への従順、仕事などへの「ノリ」の重視、これが日本社会を太く導く性質になっていっているのではないか。

だが、そうとはいえず、時間をかけて心の底を開きあってみると、はっきり意識されているかどうかは別にして、こんなに立派な建築物に囲まれているのに、どうにもならない「業(ごう)」にがんじがらめになった、固い不安の核が、心の中にできていることがみえるようだ。

もうあまり変わりそうにないこういう状況の大きな流れを見通しておかないと、なにを問題に取

り上げて話しあっても、せいぜい「ノリ」があるかどうかというところで終わって無意味なものではないか。人間にとって「すきとおった本当のたべもの」はなんだろうか、「すきとおったたべもの」で生きる共同体はどんな人間どうしの関係からできるのかということを一人一人が考えはじめると、外に、平安な「こころ」で生きられる道はもうみつからないところに来ているように思われる。その手がかりを本書でみつけていただきたい、と願っている。

● 著者紹介

つだ ますみ  
津田 眞激

1926年生まれ 東京大学経済学部卒業

現在 青山学院大学国際政治経済学部教授

一橋大学名誉教授。経済学博士，社会学博士

専攻 経営社会学および人事労務管理

主要著書 『アメリカ労働組合の構造』日本評論社，1967年

『年功的労使関係論』ミネルヴァ書房，1968年

『日本の経営の論理』中央経済社，1977年

『人事労務管理の思想』有斐閣，1977年

『現代経営と共同生活体』同文館，1981年

『日本の経営の人事戦略』同文館，1987年

『経営戦略と基盤人事』日経連広報部，1987年

『日本の情報化経営』プレジデント社，1990年

---

## 人工化社会と電腦文化

---

1992年5月30日 初版第1刷発行

著 者 津 田 眞 激

発 行 者 江 草 忠 敬

---

〒101 東京都千代田区神田神保町2-17

電話 (03) 3264-1314 (編集)

3265-6811 (営業)

振替口座 東京 6-370 番

京都支店 (606) 左京区田中門前町44

発行所 株式会社 有斐閣

---

印刷 (株)理想社 製本 株式会社養正社

©1992, 津田眞激. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

ISBN4-641-07559-X